

短期大学における大学間学生交流活動の阻害要因に関する事例研究 — 秋田市の X 短大と日高市の Y 短大の比較において —

菅原 良*

Case Study for the Disincentive of the Student Exchange between Junior College - In the Comparison between X Junior College Located in Akita-shi and Y Junior College in Hidaka-shi -

Ryo Sugawara

要旨：本研究では、秋田県秋田市に所在する X 短大と埼玉県日高市に所在する Y 短大に所属する学生に対して行った大学間学生交流活動の阻害要因に関するアンケート調査結果を比較することにより、東北地方および首都圏の短大における学生間交流阻害要因の差異を事例的に明らかにすることを試みた。その結果、東北地方と首都圏といった短大の立地による影響は少なく、いずれの短大においても、学生の大学間学生交流に参加することに対する消極的な態度と大学などによる機会づくりの不足などが、阻害要因となっていることが明らかになった。

キーワード：大学間学生交流、阻害要因、短期大学、キャリア形成

1. はじめに

学生のキャリア形成の視点に基づいて、経済産業省^[1]が全国の企業人事採用担当者に対して実施したアンケート調査（有効回答：1,179 件）によれば、学生に不足していると思う能力は、「主体性」（20.4%）、「コミュニケーション力（19.0%）」、「粘り強さ（15.3%）」の順となっている。平尾・重松^[2]によれば、特にコミュニケーション能力は、企業・官公庁など組織で働くために、また、個々人がより豊かなライフキャリアを歩むために大切な力とされている。

渡部・菅原^[3]は、学生のキャリア形成において重要とされるコミュニケーション能力を獲得するためには、普段の行動を共にする友人層ではない、異質の他者との意見や情報の交換などを通じた接触が重要であるとし、大学生にとって大学間学生交流の場が、そのような場になるとしている。また、ジョンソンら^[4]は、協同学習の研究結果から、より異質性の高い他者との意見や情報の交換などを通じた接触が重要であるとしている。

また、渡部・菅原・田中^[5]、渡部・菅原^[6]、菅原・渡部^{[7][8]}によると、国内大学の学生間交流については、多くの実践の積み重ねはあるものの研究についてはほとんど進んでおらず、大学生の「大人しい」「消極的」などの指摘に対して、その改善を目的として何らかの実践を行っているという個別の事例はあるものの、大学間交流を用いたコミュニケーション能力獲得を目的とした実践の効果や課題に関する研究はほとんどなされていない。

菅原・渡部^{[5][6][7][8][9]}は、地方大学において大学横断的な学生交流イベントが開催されたとしても、学生の参加が極めて低い場合が多いことに着目し、こういったイベントに学生が参加しない理由を明らかにすることを目的として、「学生による大学間交流尺度」を作成し（表 1）、この尺度を用いて、秋田市内の 3 大学（1 短期大学を含む）

* 明星大学明星教育センター 特任准教授
Meisei Education Center, Meisei University

の486名の学生（Nm：193、Nf：292、N.A.：1、理系学部所属：218、文系学部所属：268）を対象にしたアンケート調査を2013年11月～12月に5件法（1. そう思う、2. まあそう思う、3. どちらともいえない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない）により実施した。その結果、得られたデータの因子分析（主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転）では5因子（累積寄与率が全体の観測変数に対して40%以上になるまで因子を抽出。固有値は、第1因子：5.59、第2因子：3.60、第3因子：1.74、第4因子：1.60、第5因子：1.34）が抽出された（第1因子：学生の内向き・利己的・打算的な志向に起因する要因、第2因子：大学側のサポート不足に起因する要因、第3因子：低い自己効力感・コミュニケーション不足に起因する要因、第4因子：費用と場に起因する要因、第5因子：多忙と学力差に起因する要因）^{[6] [7] [8]}。

また、2014年1月～9月にはこの尺度を用いて東京都の6大学の文系学部に所属する452名の学生（Nm：272、Nf：180）を対象にしたアンケート調査^{[9] [10]}を行った。この調査で得られたデータの因子分析（主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転）では2因子（固有値が1.00以上の因子を抽出。累積寄与率は全体の観測変数に対して68.53パーセント。それぞれの因子の固有値は、第1因子：17.85、第2因子：1.23）が抽出された（第1因子には他者に起因する阻害要因、第2因子には自己に起因する阻害要因）^{[9] [10]}。

本研究に係る一連の研究は、大学間学生交流における阻害要因の地域差を明らかにすることを目的として始められたものであるが、分析の過程で、大学に所属している学生と、短期大学（以下、単に「短大」とする）に所属する学生、また短大であっても地方に立地する短大と首都圏に立地する短大とでは、大学間学生交流を阻害する要因に関する学生の意識に相違がある可能性があることが推測された。そこで、本研究では「学生による大学間交流尺度」を用いて、秋田市と日高市の短大（本研究では、秋田県秋田市内のX短大と埼玉県日高市内のY短大を事例的に扱う）に所属する学生に対して行ったアンケート調査により取得したデータの分析結果を比較することにより、地方と首都圏といった短大の立地の相違によって、学生交流阻害要因に対する意識に差異があるか否かを事例的に明らかにすることを試みる。なお、X短大は保育系、Y短大はビジネス系である。

2. アンケート調査の実施

X短大に所属する学生に対して行ったアンケート調査は、2013年11月から12月にかけて、249名の学生を対象として、5件法（1. そう思う、2. まあそう思う、3. どちらともいえない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない）により実施した（表2）。また、Y短大に所属する学生に対して行ったアンケート調査は、2016年11月に79名の学生を対象とし、同様に5件法により実施した（表3）。

3. 回答傾向の比較

取得したデータを用いて、「思う（1）」に「やや思う（2）」を加えた割合を質問項目間で比較したところ、X短大で27項目のうち12項目（Q2、Q3、Q4、Q5、Q6、Q11、Q14、Q15、Q19、Q20、Q21、Q25）で50%以上となり、Y短大では8項目（Q3、Q4、Q11、Q14、Q15、Q20、Q21、Q25）で50%以上となった（図1）。

表 1 学生による大学間交流尺度

Q1	必要性が感じられない	Q15	合同授業がない
Q2	共有する情報が少ない	Q16	他大学に興味がない
Q3	大学間の距離が遠い	Q17	大学が少ない
Q4	大学が交流の場を作ってくれない	Q18	費用がかかる
Q5	いまの友人関係で十分	Q19	集まる場所がない
Q6	交流しようとする雰囲気がない	Q20	普段の生活が忙しい
Q7	自分の専門分野とは関係ない	Q21	交流イベントがない
Q8	意義が見出せない	Q22	アルバイトが忙しい
Q9	交流するのがわずらわしい	Q23	目的を見つけるのが難しい
Q10	大学のサポートが不足している	Q24	学生のコミュニケーション能力が低い
Q11	交流の方法がわからない	Q25	他大学をよく知らない
Q12	動機や意欲が不足している	Q26	他人との交流が苦手
Q13	学力差が大きい	Q27	メリットが感じられない
Q14	きっかけがない		

また、9項目「Q2 (X:51.41%、Y:21.52%)」、「Q5 (X:51.61%、Y:30.38%)」、「Q6 (X:61.85%、Y:43.04%)」、「Q12 (X:38.15%、Y:26.58%)」、「Q14 (X:84.74%、Y:70.89%)」、「Q17 (X:49.40%、Y:15.19%)」、「Q19 (X:58.63%、Y:46.84%)」、「Q20 (X:65.73%、Y:55.70%)」、「Q21 (X:77.42%、Y:62.03%)」でX短大の方が10ポイント以上の大きな差となった(図1)。特に、「Q2:共有する情報が少ない」、「Q5:いまの友人関係で十分」、「Q17:大学が少ない」では、X短大の方が20ポイント以上大きくなっている(図1)。

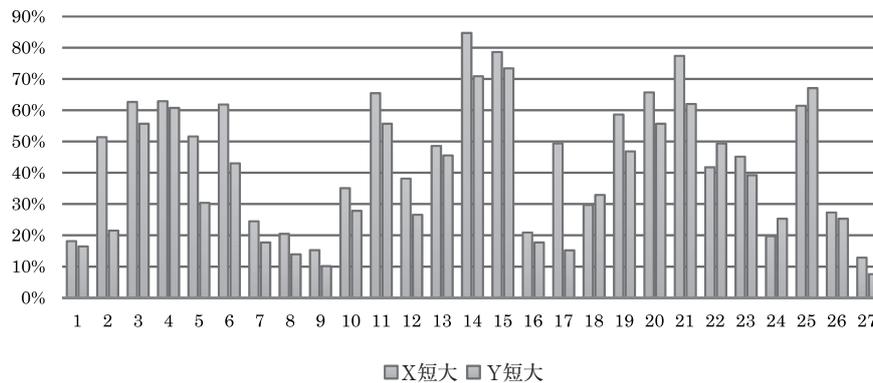


図 1 質問項目別回答割合の比較

X短大の学生は、Y短大の学生と比較して、他大学の学生と交流することの利点を見出すことができず、大学間学生交流に積極的に関わろうとする意識が希薄であるように思われる。

また、Q24、Q26に見られるように、双方に共通してコミュニケーション能力の不足や他人とのコミュニケーションの苦手意識を持っているとする割合(「1. 思う」「2. やや思う」と回答した割合)は、いずれの項目でも25%程度に留まる。全国の企業人事採用担当者が学生のコミュニケーション能力の不足を指摘している^[1]が、学生自身はコミュニケーション能力の不足をあまり感じていないようであるが、この場合のコミュニケーション能力は、企業人事採用担当者と学生との間では、その認識(深さ、広がり、説得力など)において相違がある可能性が考えられる。

4. 因子分析

調査で得られたデータについて、学生による大学間交流尺度27項目について得点分布を確認したところ、いくつ

かの質問項目で得点分布の偏りがみられたが、質問項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目においても大学間学生交流阻害要因を測定するうえで不可欠なものであると考えられることから、本研究では項目を除外せず、すべての質問項目を分析対象とした。

次に、X短大の調査で得られたデータについて、大学間交流尺度の27項目に対して最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は6.21, 3.59, 1.80, 1.42, 1.21, 1.18, 1.07（固有値が1以上）となり、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった14項目を分析から除外し、再度最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った（表2）。

第1因子は7項目で構成されており、「意義が見出せない」「メリットが感じられない」「交流するのがわずらわしい」「他大学に興味がない」など、大学間学生交流に参加することに対する消極的な態度が示されていると考えられる。第2因子は6項目で構成されており、「交流イベントがない」「きっかけがない」「大学のサポートが不足している」など、大学などによる機会づくりの不足が示されていると考えられる（表2）。

同様に、Y短大の調査で得られたデータについて、大学間交流尺度の27項目に対して最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は、4.89, 4.04, 2.48, 1.85, 1.58, 1.34, 1.21, 1.11, 1.01（固有値が1以上）となり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った。

その結果、十分な因子負荷量を示さなかった12項目を分析から除外し、さらに4因子を抽出することに変更したうえで、再度最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転による因子分析を行った（表3）。

第1因子は7項目で構成されており、「交流するのがわずらわしい」「メリットが感じられない」「他大学の興味がない」といった、大学間学生交流に参加することに対する学生の消極的な態度が示されていると考えられる。第2因子は2項目で構成されており、「大学が交流の場を作ってくれない」「大学のサポートが不足している」の大学などによる機会づくりの不足が示されていると考えられる。第3因子は3項目で構成されており、「アルバイトが忙しい」「普段の生活が忙しい」といった、日常生活の多忙による理由が示されていると考えられる。第4因子は3項目で構成されており、「交流の方法がわからない」「動機や意欲が不足している」といった、希薄な参加意識が示されていると考えられる（表3）。

表2 X短大生を対象としたデータの因子分析

質問項目	因子		Cronbachのα
	1	2	
Q8	.803	.039	.739
Q27	.754	-.065	.747
Q9	.707	-.014	.756
Q16	.704	-.133	.749
Q7	.699	.100	.743
Q5	.612	-.103	.761
Q1	.608	-.138	.763
Q21	.139	.726	.763
Q14	.016	.680	.771
Q10	.059	.617	.772
Q4	-.059	.602	.780
Q15	.031	.581	.776
Q11	.089	.520	.774
寄与率	.267	.185	—
累積寄与率	.267	.452	—
	—	—	.776

(N:249)

表3 Y短大生を対象としたデータの因子分析

質問項目	因子				Cronbachのα
	1	2	3	4	
Q9	.823	.062	-.138	.089	.688
Q27	.641	.038	.137	-.043	.686
Q16	.606	-.020	-.082	-.190	—
Q7	.576	.112	-.017	.016	.701
Q1	.567	-.027	.114	.122	.702
Q26	.528	.008	.111	.262	.685
Q5	.517	-.056	.062	-.216	.714
Q4	.037	1.037	.077	-.137	.715
Q10	.068	.637	-.286	.134	.731
Q22	.071	-.046	.863	-.099	.715
Q20	.208	-.162	.662	.031	.697
Q6	.086	.386	.429	.021	.699
Q11	-.120	.020	-.163	.758	—
Q12	.246	-.119	-.008	.756	—
Q14	-.271	.135	.344	.465	—
					.722

(N:79)

本研究で得られた X 短大の学生を対象として行った調査（表 2）と、Y 短大の学生を対象として行った調査（表 3）で得られたデータの因子分析結果を比較すると、X 短大の第 1 因子、Y 短大の第 2 因子に共通に含まれる質問項目は、Q27、Q9、Q16、Q7、Q5、Q1。X 短大の第 2 因子、Y 短大の第 1 因子に共通に含まれる質問項目は、Q4、Q10 であった（表 4）。

表 4 X 短大と Y 短大の調査から得られた因子に含まれる質問項目の比較

1 (因子)	Q8, Q27, Q9, Q16, Q7, Q5, Q1
2	Q21, Q14, Q10, Q4, Q15, Q11

注) 第 1 因子の太字は X 短大の第 1 因子、Y 短大の第 2 因子に共通する質問項目。太字以外は、X 短大のみに含まれる質問項目。第 2 因子の太字は X 短大の第 2 因子、Y 短大の第 1 因子に共通する質問項目。太字以外は、X 短大のみに含まれる質問項目。

5. 考察

アンケート調査から、「きっかけがない」「合同授業がない」ことが、X 短大と Y 短大に共通する大学間学生交流を阻害する大きな要因であることがわかった（図 1）。また、因子分析からは、X 短大の調査で得られたデータの第 1 因子と Y 短大の調査で得られたデータの第 2 因子、前者の第 2 因子と後者の第 1 因子にそれぞれ共通して含まれる質問項目（表 4）があることから、大学などによる機会づくりの不足と大学間学生交流に参加することに対する消極的な態度は、地方と首都圏といった短大の立地によって異なるものではないことが明らかになった。

また、Y 短大の調査で得られたデータの分析結果は、第 1 因子に「大学側のサポート不足に起因する要因」、第 2 因子に「学生の内向き・利己的・打算的な志向に起因する要因」が抽出された首都圏 6 大学の文系学部における調査結果^[10]と類似する。Y 短大の調査では 4 因子、首都圏 6 大学の文系学部における調査では 5 因子が抽出されており、X 短大で実施した調査の因子分析結果と比較して因子が多くなっている。この結果を受けて Y 短大で実施した学生に対する聞き取り調査では、「大学周辺に他大学がたくさんあるので、他大学の学生と接する機会は多く、大学に機会をつくってもらわなければならない必要性をあまり感じない」、「インターンシップに参加することによって、十分にコミュニケーション能力は伸びると思う」といった指摘があった。本研究を進める動機として、地方では学生のインターンシップを受け入れてくれる企業が少なく、学生のニーズに十分に答えることができないことが挙げられるが、首都圏の大学においては、これらの点に関するニーズは小さいと思われる。

地方大学におけるインターンシップ受入先企業等（その他に行政機関や NPO などが考えられる）の少なさ、受入態勢の脆弱さ（受入プログラムの不確定さ、人員配置の問題等）に起因して、地方大学に在籍する大学生の職業体験によるキャリア形成の機会が不足していることを問題意識として、これらの問題を代替する可能性が考えられる方略として、大学生が大学の垣根を超えて交流する大学間交流に焦点を当て、大学間学生交流活動があったとしてもそれらの活動に参加しない学生の「参加しない理由」について検討してきた^{[5] [6] [7] [8]}。

これらに関しては、菅原・渡部^{[7] [8]}、菅原・渡部・勝又・神崎^{[9] [10]}の研究から、大学間学生交流を実践していかなければならない大学や行政機関といった、他者に起因する理由による阻害要因の影響が大きいと考えられるが、本研究における Y 短大の学生に対する調査の第 3 因子、第 4 因子に見られるような、日常生活の多忙による時間の制約であるとか、希薄な参加意識に起因する阻害要因があることが推察され、様々な要因が絡み合った複雑なものであることがわかってきた。

地方大学における大学間学生交流の阻害要因と首都圏の大学におけるそれとでは、第 1 因子と第 2 因子に抽出された要因においては、大学の立地に関わらず学生の意識に合致するものであると考えられるが、第 3 因子以降に抽出さ

れた因子が首都圏の大学において特徴的な要因である可能性がある。これらについては、今後の研究課題とし、継続して研究を進めていきたい。

参考文献

- [1] 経済産業省：大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査（2010）
- [2] 平尾元彦、重松政徳：大学生のコミュニケーション能力とキャリア意識、大学教育、4、pp.111-121（2007）
- [3] 渡部昌平、菅原良：大学間交流を活発化するための探索的研究—学生に対するヒアリング調査から—、秋田県立大学総合科学研究彙報、15、pp.95-96（2014）
- [4] ジョンソン、W.D、ルベック、I.J、ジョンソン、T.R.：学習の輪—アメリカの協同学習入門、二瓶社（1998）
- [5] 渡部昌平、菅原良、田中元志：県内学生が大学間交流活動を行う場合の阻害要因に関する調査研究、平成25年度大学コンソーシアムあきた学際的プロジェクト研究報告書（2014）
- [6] 渡部昌平、菅原良：大学間交流の阻害要因に関する探索的研究、日本社会心理学会第55回大会論文集、p.218（2014）
- [7] 菅原良、渡部昌平：地方大学における大学間学生交流の阻害要因に関する探索的研究、キャリアデザイン研究、11、pp.119-125（2015）
- [8] 菅原良、渡部昌平：地方大学における学生の大学間交流活動の阻害要因に関する研究、日本キャリアデザイン学会第11回研究大会資料集、pp.33-36（2014）
- [9] 菅原良、渡部昌平、勝又あずさ、神崎秀嗣、大学間学生交流活動の阻害要因測定尺度の開発と評価、第9回パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会講演論文集、A3-5（2014）
- [10] 菅原良、渡部昌平、勝又あずさ、神崎秀嗣：首都圏の文系学部における大学間学生交流の阻害要因に関する一考察、パーソナルコンピュータ利用技術学会論文誌、11、1、pp.1-6（2016）